

## I 研究主題と副題

**「学ぶ意欲」を高め、確かな学力の向上を目指す授業の創造**  
～児童生徒一人一人が必要感をもち、共に学び合う授業づくり（国語科、算数・数学科）をとおして～

## II 主題設定の理由

情報化やグローバル化、人工知能の進化といった社会的変化は加速度を増し、今後の社会は一層高度化、複雑化することが予想されている。このような時代の中、学校教育には、児童生徒に対し、主体的に学びに向かい、よりよく問題を解決しようとする力や、対話や議論などの学び合いを通じて自分の考えを伝えたり、相手の考えを理解して、考えを広げたり深めたりしていくことができる力を育成することが求められている。

新学習指導要領においても、「育成すべき資質・能力の三つの柱」の一つに「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」が挙げられている。この「学びに向かう力」は、学校教育法第30条第2項に規定される「主体的に学習に取り組む態度」を含意しており、「学ぶ意欲」と大きく関連するものととらえることができる。つまり、児童生徒が何のために学ぶのかといった、学ぶことへの意義や必要感を存分に感じ、「学ぶ意欲（知的好奇心、向上心）」を高めながら学習に向かっていくことは、これからの新しい時代に必要となる資質・能力である。

そこで、本研究においては、3か年計画で「学ぶ意欲」と「確かな学力」をキーワードに、授業改善や学習指導の在り方を究明する研究に取り組んでいる。初年度となる昨年度は、一単位時間における課題設定の工夫や肯定的評価活動に関する研究と検証を行い、児童生徒一人一人に自分の考えをもたせ、有能感や自己決定感を感じさせるなどの成果を収めることができた。一方で、「学ぶ意欲」を継続させる単元全体を見通した計画的な実践や一人一人の考えをさらに深めていくための研究が課題として残った。

これらのことを踏まえ、今年度は、「児童生徒一人一人が必要感をもち、共に学び合う授業づくりをとおして」を副題として設定した。この副題のもと、小中一貫した系統的な指導を意識しながら、課題設定の工夫、学び合いの充実、振り返り活動の充実について、研究を深めることとした。

これらを究明することで、本主題に迫るとともに、本市の学校教育ビジョンの達成につながると考える。

## III 研究目標

都城学校教育ビジョンにおいて、児童生徒一人一人に確かな学力を育成するための指導方法を究明していくことが本教育研究所に課せられている。そこで、児童生徒一人一人の「学ぶ意欲」を継続させる単元レベルでの授業構想を基盤とした指導の充実を図ることで、確かな学力を向上させるための手立てを明らかにする。

## IV 研究仮説

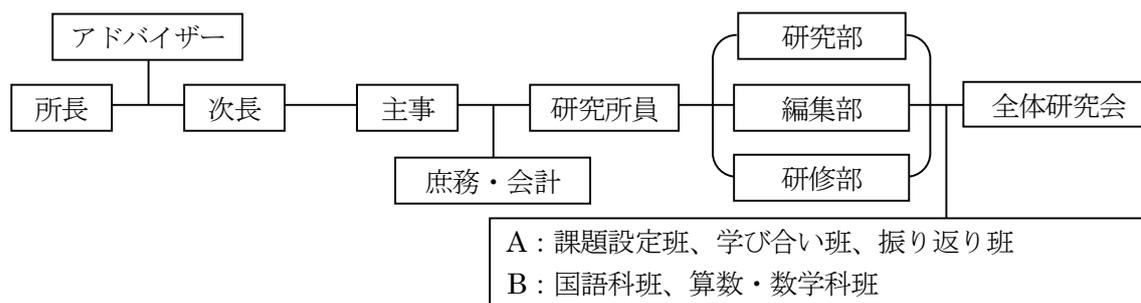
小・中学校の一貫した教育の系統性を踏まえた、単元レベルでの授業構想を基盤とし、以下のような指導の充実を図ることで、児童生徒が目的や見通しをもって学習に取り組み、必要感や達成感を感じながら考えを深め、意欲的に学習内容を身に付けていくことができるのではないかと。

- (1) 課題設定の工夫
- (2) 学び合いの充実
- (3) 振り返り活動の充実

## V 研究の全体構想



## VI 研究組織



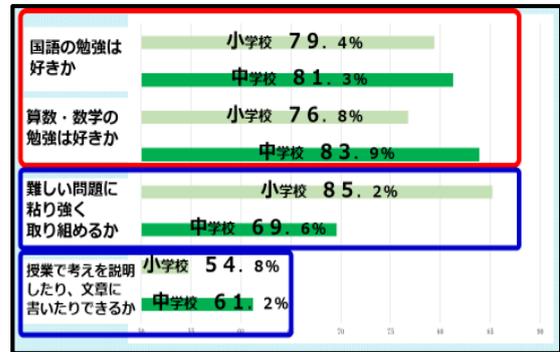
※研究所員はA及びBに属して研究を推進する。

## VII 研究内容

### 1 研究の基本的な考え方

#### (1) 児童生徒の実態（意識調査の結果）から見てきた課題

本年度の「全国学力・学習状況調査質問紙」を参考に児童生徒を対象としたアンケートを研究所員所属校で実施したところ、次のことが明らかになった。①「国語、算数・数学の勉強は好きか」の項目で小中学校ともに肯定的回答の割合が約80%と高かった。しかし、「難しい問題に粘り強く取り組めるか」については、小学校85.2%に対して中学校は69.6%と、大きな差があることも分かった。



【資料1 研究所員所属校におけるアンケート結果】

また、②「授業で自分の考えを説明したり、文章に書いたりできるか」の項目では、小学校54.8%、中学校61.2%と肯定的回答の割合は約半数と、他の質問項目に比べて小・中学校ともに低い結果であった【資料1】。

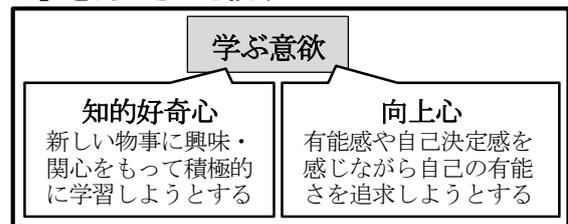
小・中学校ともに、学習は好きだが表現が苦手な児童生徒が多いことから、その差を埋めるための手立てとして、「学ぶ意欲」を高める手立てが必要であると考えた。また、小学校と中学校とでは、粘り強く取り組むことに苦手意識をもつ児童生徒の割合に差があることから、小中一貫した系統的な指導を充実させる必要がある。

#### (2) 本研究所が目指す「学ぶ意欲」と「確かな学力」を向上させる授業

「確かな学力」は、現行学習指導要領がねらいとした「生きる力」の知の側面である。

さらに、「学ぶ意欲」は、確かな学力を構成する8つの基礎・基本として位置付けられていた。

一方、新学習指導要領（平成29年告示）では、「生きる力」の三要素を総合的にとらえなおし、「育成すべき資質・能力の三つの柱」をねらいとした。これによって、確かな学力を構成する8つの基礎・基本は、他の要素と共に育成すべき三つの柱に分散・整理、構造化された。その中で「学ぶ意欲」については育成すべき資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力、人間性等」に関連するものとして位置付けられた。



【資料2 「学ぶ意欲」のとらえ】

本研究所は、昨年度より「学ぶ意欲」を「知的好奇心」と「向上心」の二つの側面からとらえ、研究を進めている【資料2】。昨年度は一単位時間における研究仮説の検証であったため、学習内容を単元全体で見通してとらえ、「学ぶ意欲」を継続させる授業づくりの研究が課題として残った。

「小学校学習指導要領 総則編」において、

(2) 改定の基本方針③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進  
 エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

とあり、単元のまとまりを見通した授業改善の視点が示されている。

以上のことから、本年度は児童生徒の「学ぶ意欲」を継続させる単元レベルの授業構想を基盤とし、児童生徒に課題解決の必要感をもたせながら、効果的な学び合いや振り返りによる一人一人の考えを深める授業づくりを目指すことにした。

### (3) 単元レベルの授業構想

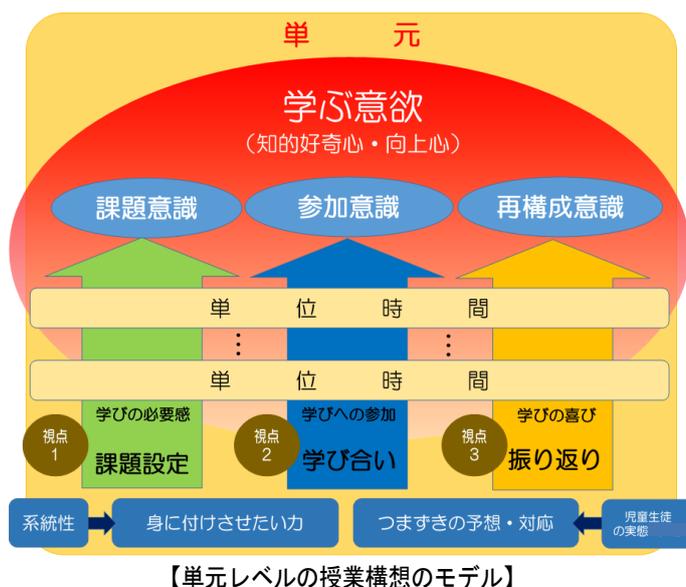
#### ① 単位時間（切れ目）にとらわれない「学ぶ意欲」を高めるための各学習段階の指導

「知的な好奇心」と「向上心」からなる「学ぶ意欲」を、児童生徒の行動や意識の形に具現化することで、授業改善が図られると考えた。つまり、学びの必要感や意欲をもたせる「課題意識」、自他の比較を通して新しい考えを再構築する「参加意識」、学びの過程や成果等を実感しながら、学びを日常生活と結び付けさせる「再構成意識」の三つの意識をもたせることで、「学ぶ意欲」を高めることができると考えた。

児童生徒が三つの意識のいずれか、もしくはすべてをもち得たとき、「学ぶ意欲」が高まった状態といえる。さらに単元でのすべての学習段階で意欲を継続できることが、主体的・対話的で深い学びとなると考える。

ただし、本年度、本教育研究所では、単元レベルの授業構想において、課題意識は導入段階における「課題設定の工夫」、参加意識は展開段階における「学び合いの充実」、再構成意識は終末段階における「振り返りの充実」のように、それぞれの段階で視点として位置付け、具体的な手立てを講じることとした。

このように、「学ぶ意欲」という情意面の基礎・基本を児童生徒の意識として整理し、単元レベルの授業構想における各学習段階の指導の工夫によって、授業の充実を図ることができると考えた。



#### ② 重点を置く指導事項の系統性

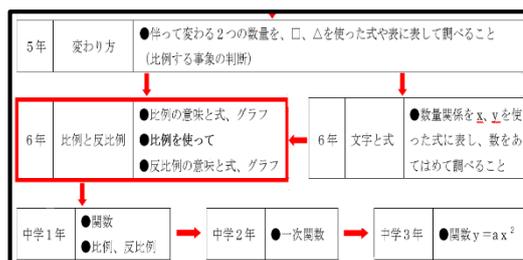
身に付けさせるべき基礎・基本を定着させるためには、指導事項のまとまりとしての単元が、小・中学校でどのように系統付けられているかを指導者が理解しておく必要がある。その意義について、「新学習指導要領の手引き」(国語科：宮崎県教育委員会)では、「学習の系統性の重視」として、

国語科の指導内容は螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることから、小・中学校を通じて、指導事項及び言語活動例のそれぞれにおいて、重点を置く指導事項を明確にし、その系統性を図った。(学習指導要領解説編巻末系統表を参照)

と示されている。また、算数・数学科の領域の構成にも「小・中学校の接続を意識し、内容の系統性や発展性を考慮している」と示されており、繰り返し学習や小・中学校を通じた重点を置く授業の重要性が述べられている。つまり、授業を構想するにあたって、学習内容のまとまりとしての単元について「系統性」が大切な視点として位置付けられている。

そこで、小・中学校を通じた系統性を踏まえた学習内容の系統図を授業構想段階で作成することで、教師による児童生徒のつますきの予想やその対応ができるようにした。そして、児童生徒に身に付けさせたい力や児童生徒の実態に即しながら、各学習段階の指導を工夫することで、単元全体で児童生徒の継続的な「学ぶ意欲」を支えていくものとした

【資料3】。



【資料3】単元レベルでの授業構想における「身に付けさせるべき力」の系統図の例 (一部)  
(小学校6年 算数科「比例と反比例」)

## 2 課題設定の工夫（課題意識）

### (1) 意義（よさ）

児童生徒の学びが主体的になるには、学習問題を解いてみたいという知的好奇心をもたせることが必要である。単元や一単位時間の導入において、児童生徒の「学ぶ意欲」を高めるような単元や問題との出会いをつくり、知的好奇心や学習への必要感をもたせて課題を設定することは、主体的な学びへと繋がっていく。また、「できるようにになりたい」という向上心をもたせ、単元のゴールにおける自分の姿をイメージさせておくことは、単元全体の学習を通して「学ぶ意欲」を継続させていく上でも重要である。

### (2) 定義

学習指導要領解説（総則編）では、児童生徒が学ぶことに興味や関心をもつことや見通しをもって粘り強く取り組むことなどが主体的な学びの実現に向けて重要になると示されている。そこで、本教育研究所では、課題設定を「学習経験や生活体験にもとづく興味・関心・意欲をもとに、自ら課題を見出し、見通しをもつこと」と定義した。

### (3) 手立て

単元の学習を見通し、「学ぶ意欲」に繋がる児童生徒の課題意識を高めるための手立てとして、以下の二つの研究を重点的に行うことにした。

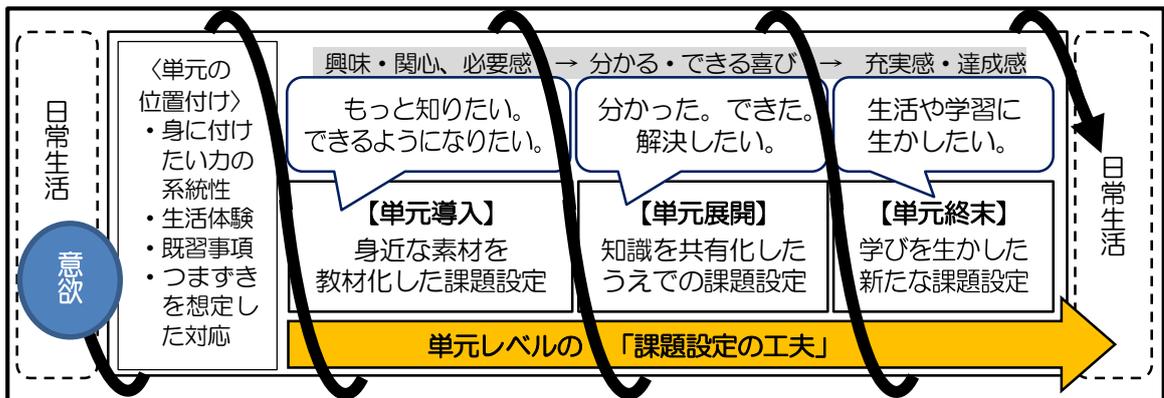
#### ○ 身近な素材を教材化した課題設定〈単元導入〉

単元の目標や学習内容を具体的にイメージできるように、児童生徒にとって身近な素材や生活場面を教材とし、具体物を使った体験的な活動を取り入れるなど、日常生活との関連から課題を設定する。また、どのような力を身に付けたいかを児童生徒も意識できるようにする。

#### ○ これまでの学びを生かした新たな課題設定〈単元終末〉

児童生徒が単元の学習を通して身に付けてきた知識・技能等を生かすことができる学習課題を設定する。その際、日常生活とのつながりを意識した課題となるようにする。

### 【「課題設定の工夫」と「学ぶ意欲」の関連】



## 3 学び合いの充実（参加意識）

### (1) 意義（よさ）

本市には、「自分の考えを友だちに説明したり、文章に書いたりすること」に対して苦手意識をもっている児童生徒が多いという実態があり、話したり書いたりして自分の考えを相手に説明する表現力を伸ばしていく必要がある。また、学び合いの意義を「必要感をもって学び合うとともに、そのよさを実感すること。さらに、よさを実感したことで、学び合いに新たに必要感をもつこと」、児童生徒相互の「肯定的なコミュニケーションを通して、分かたり気付いたりすること」ととらえた。

### (2) 定義

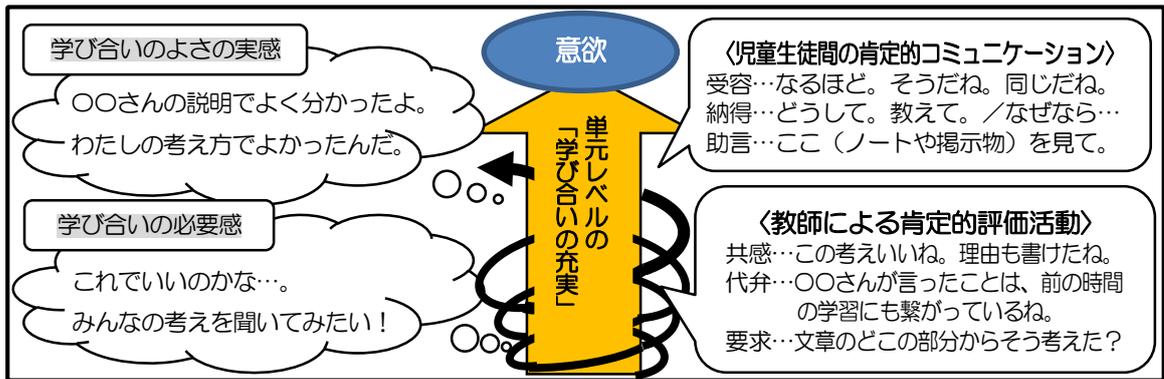
前述した新学習指導要領にも示されるように、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が求められている。そこで、本教育研究所では、学び合いを「児童生徒が互いの考えを交流させ、分からなかったことが分かるようになったり、新たな考えに気付いたりすること」と定義した。

### (3) 手立て

単元の学習を見通し、目的に応じて学び合いを繰り返し行うことで、表現力を伸ばすとともに、「学ぶ意欲」の継続につなげるため、以下の二つの手立てを研究することにした。

- 児童生徒が必要感を持ち、学びに進んで参加しようとする学び合い〈単元全体〉  
 学び合いの必要感をもたせる発問や指示を行うとともに、肯定的コミュニケーションの仕方を提示することで、進んで学び合いに参加し、個人では経験できない学びのよさを実感させる。
- 分かる、気付く学び合い〈単元全体〉  
 目的に応じて教具を選定し、活用させることで、効果的な伝え方を工夫させたり、肯定的コミュニケーションの状況を見取り、指導者の肯定的評価活動によって学び合いを価値付けたりする。

【目的や必要感に応じた「学び合いの充実」】



4 振り返り活動の充実（再構成意識）

(1) 意義（よさ）

昨年度の課題に「児童生徒に毎時間振り返りを書かせ、その自己評価を教師が見取るための時間の確保が難しい」が挙げられた。そこで、単元レベルでの学習のまとまりを見通しながら、計画的に単元の中に教師による評価や振り返りの場面を設定することにした。

「振り返り活動」を行うことによって、教師が児童生徒の学びを把握し、単元レベルでの指導計画を再構築したり、児童生徒が学びのよさを実感する他、学習内容を見直したりするうえでも必要なことである。

(2) 定義

新学習指導要領 総則編の「教育課程の実施と学習評価」の中にも、「児童のよい点や進歩の状況などの積極的な評価」「学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」とある。そこで、本教育研究所では、振り返り活動を「学びの過程や成果を実感し、意識しながら自己の学びを分析・再構成したり、学習と日常とを結び付けたりすること」と定義した。

(3) 手立て

児童生徒が、学びの過程や成果を実感し、意識しながら、自己の学びを分析することや、学ぶことの意義や必要感を実感させるために、日常生活と結び付けたりするための振り返り活動として、以下の二つの手立てを研究することとした。

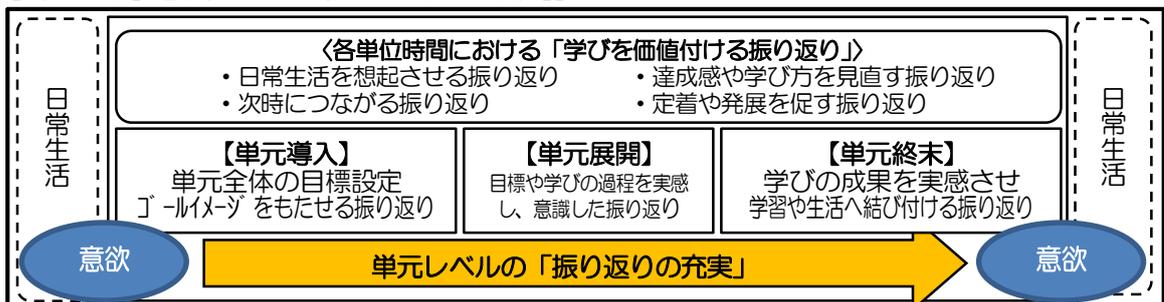
○ 学びの過程や成果を実感し、意識させる振り返り〈単元導入、単元展開〉

学びの意義を理解し、単元のゴールイメージをもたせるとともに、単元または一単位時間の学びの過程や成果について振り返りをさせる。これによって、学び合いなどの学習方法の有効性や成果、次時以降の見通しをもたせる。

○ 学びと日常生活を結び付ける振り返り〈単元終末〉

学んだことを日常生活と関連付けて、学びの意義を実感させたり、学びを日常生活に生かせるかを考えさせたりする。

【「学ぶ意欲」を継続させる「振り返り活動の充実」】



## VIII 検証授業と考察

単元レベルの授業構想とその実践については、検証授業と考察を各段階（導入・展開・終末）で述べる。また、三つの研究の視点を検証1～3に挙げた。

### 1 単元導入（小学校第6学年 算数科「比とその利用」）

[本単元のねらい]

比の意味や表し方を理解するとともに、図や式を用いて数量の関係の比べ方を考え、それを日常生活に生かす力を伸ばす。

検証授業では、単元の導入として、学ぶ必要感をもたせるために単元のゴールにおける自分の姿をイメージさせるとともに、単元の見通しをもたせるための時間として位置付けた。

#### (1) 検証1：課題意識 **身近な素材を教材化した課題設定**

教科書の問題を参考にしながら、具体物を操作する体験的な数学的活動を取り入れていくことで、比の意味とその表し方について実感を伴って理解させ、比の利便性や実用性を感じさせながら、比の学習への必要感を高められるようにした。啓林館の教科書では、単元導入で、酢とサラダ油の割合からおいしいドレッシングを作るという問題場面が提示されている。そこで、実際にドレッシングを作る他、だし汁や食品以外も試みる中で、児童にとってさらに身近で、必要感をもつことができる「比」を扱った生活場面を模索した。そうした試行錯誤の結果、希釈飲料を問題とし、具体物を使った体験的な活動を取り入れた【資料4、5】。



実際に、教科書に提示してある比率で作ったところ、「薄い」「すっぱい」「油っこい」の差が分かりにくかった。

【資料4 教科書の問題場面】



希釈飲料は、生活経験からも児童にとって身近で、イメージがしやすく、解決の必要性を実感できる問題である。

【資料5 身近な素材の教材化】

実際に具体物を操作する活動を行うことで、実感を伴って理解させるとともに、学習内容の利便性や実用性を感じさせ、学習の必要感を高められるようにした。また、問題を具体的に操作するため、学力下位層の児童にとっても生活体験をもとに自分の考えをもつことができ、意欲的に学習に取り組むことができた。

#### (2) 検証2：参加意識 **必要感のある学び合い**

体験的で数学的な活動（希釈飲料作り）をもとに、混ぜ方の割合について話し合う場を設定した。考えを交流する際、「これまでの経験や習ってきたどの学習が使えるか」と発問することで、学び合う必要性が生まれ、児童は互いの言葉や考えをもとに、比という新しい割合の表し方に結び付けていった。多様な考えの交換を通して、比の利便性の実感につながった【資料6】。

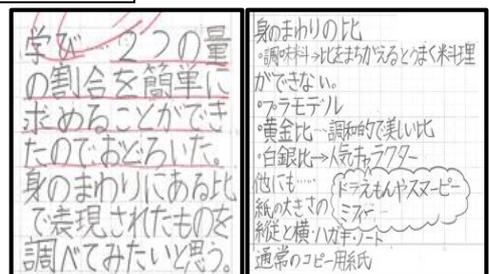


【資料6 割合の表し方を話し合う児童】

#### (3) 検証3：再構成意識 **学びの過程や成果を実感させる振り返り**

児童が抱いた思いや疑問を記述させ、学級全体で共有した。比の利便性や身の回りの比への興味関心をもたせることができることが分かった【資料7】。

また、日常生活とのつながりに気付かせ、児童の思いに寄りそった単元の学習課題を設定したことで、単元のゴールにおける自分の姿を明確にイメージさせることができた。授業後、家庭で身の回りにある比で表されているものを調べたり探したりして、紹介する児童もいた【資料8】。



【資料7 児童の振り返り】

【資料8 自主調べ】

## 2 単元展開（小学校第1学年 国語科「いろいろなふね」説明的文章）

[本単元のねらい]

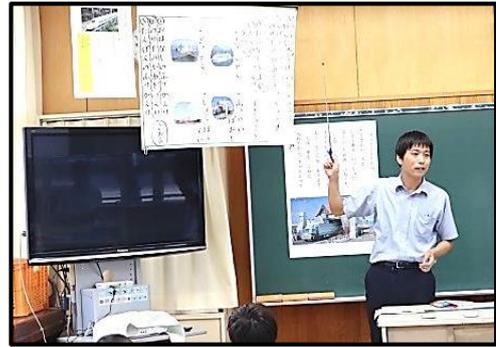
文章を読んで乗り物の説明を書く活動を通して、説明的な文章を読解する基礎的な力を養い、楽しんで読書しようとする態度を育てる。

検証授業では、単元の展開において、文章中からいろいろなふねの「役目」「つくり」「できること」について書かれた部分を正確に見付け、学び合いを通して文章の内容を正しく読み取る技能を身に付けるための時間として位置付けた。

### (1) 検証1：課題意識 **知識を共有化しうえでの課題設定（H29継続研究）**

学習計画表を用いて、いろいろな船の「役目」、「つくり」、「できること」を書き抜く学習をふまえて、単元末に「のりものカード」を作ることを確認した。その際、掲示物を用いて既習事項を復習することで、課題解決に必要なレディネスをそろえた【資料9】。

児童は、前時までの学習内容を想起することによって、本時のフェリーボートについて「役目」、「つくり」、「できること」を見付けようとする意欲が高まり、『フェリーボートの「やくめ」「つくり」「できること」をせつめいすることばやぶんをかきぬこう』というめあてを立てることができた。



【資料9 掲示物を用いた知識の共有化】

### (2) 検証2：参加意識 **分かる、気付く学び合い**

学び合いの中で、教えてもらった時には必ず、「どうして？」と尋ね、自分が納得することで、「わかった」（理解した）ことになる。本時は、児童間で「どうしてここが役目なの？」「だってここに“ため”という言葉が書いてあるでしょう。」「なるほど。」などの肯定的コミュニケーションによる学び合いを見取ることができた【資料10】。

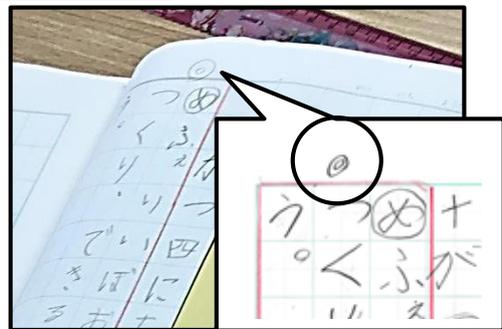
さらに、学び合いの後に「話し合ってみてどうだった？」と尋ねると、「3人で話し合ったから分かった。」という発言があった。このことから、「学び合うことにより、分からなかったことが分かるようになる」という意識を全体で共有することができた。



【資料10 肯定的コミュニケーションによる学び合い】

### (3) 検証3：再構成意識 **学びの過程や成果を実感させる振り返り**

終末の段階では、フェリーボートの「役目」、「つくり」、「できること」が分かったかという観点で自己評価させた。本時は単元の展開段階であり、学び合いに多くの時間を設定したために、「◎（よく分かった）」「○（まあまあ分かった）」「△（分からなかった）」の中から、いずれかをノートに書かせるようにした。振り返りの時間を確保し、これまでの自己評価と見比べることによって、児童は、内容のまとまりを押さえて読んだり書いたりする力の伸びを実感することができた【資料11】。



【資料11 本時の振り返りの記入】

### 3 単元終末（中学校第2学年 国語科「哲学的思考のすすめ」説明的文章）

〔本単元のねらい〕

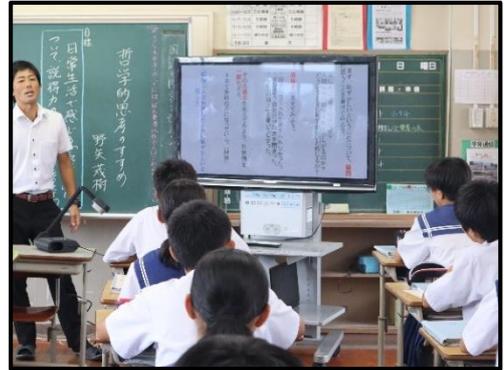
筆者のものの見方や考え方について、自分の体験と結び付けながら筆者の論の進め方の工夫を理解させるとともに、作文を書くことによって学びを発展・深化させる。

検証授業では、単元の終末として、これまで学習してきた「説得力を高める」ための技能を実際に生かし、学びを日常生活と結び付けるための時間として位置付けた。

#### (1) 検証1：課題意識 **これまでの学びを生かした課題設定**

本時の目標を達成するために、これまでの学習内容や、本時の学習に必要な学習用語をおさえることから始めた。筆者の論証の仕方や学習用語をICTや掲示物を使い提示することで、本時の学習に必要なレディネスをそろえることとした【資料12】。

本時の学習は、生徒が選択した身近な問題である「友情」をテーマに、哲学的思考を用いて考えさせた。「友情とは何か」の問いは、日常生活において、ごく身近なものであり、生徒たちが意欲的に活動に取り組もうとする姿が見られた。



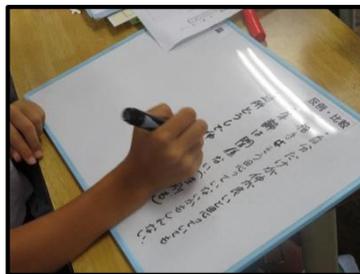
【資料12 既習事項の確認と課題設定】

#### (2) 検証2：参加意識 **分かる、気付く学び合い**

筆者の論証の仕方を踏まえて、「友情」について仮の結論を個人で考えさせた。その後、グループでの学び合いによってお互いに反例や比較などを用いて検討させ、より説得力のある（強い）結論を考えさせた。学び合いの際は、肯定的コミュニケーションを心がけさせ、グループ内での意見を視覚的にまとめるためのホワイトボードを活用させることによって、多くの意見を共有することができ、活発な学び合いができた。また、各グループの意見を全体で共有した後、再度個人で結論を見直し発表させることで、学び合い前後の自分や友達の考えの変容に気付かせることができた【資料13、14、15】。



【資料13 肯定的コミュニケーションを心がけた学び合い】



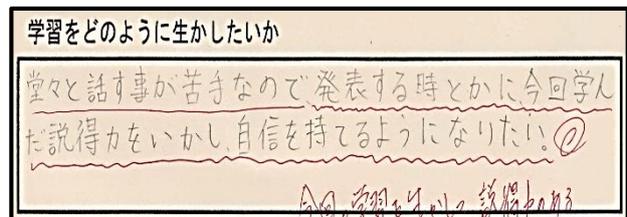
【資料14 意見を視覚化するホワイトボードの活用】



【資料15 学び合いの成果に気付く】

#### (3) 検証3：再構成意識 **学びと日常生活を結び付ける振り返り**

終末では、「説得力を高める」学習を日常生活と結び付けさせるために、「どのように生かしたいか」という視点で振り返りを行った。単元計画と併用の自己評価カードに記入させることで、これまでの単元の学習を振り返らせながら記述させるようにした。生徒は、日常生活のさまざまな場面を想起しながら、学習したことを日々の生活に生かす場面を記述することができていた【資料16】。



【資料16 自己評価カードを用いた日常生活と結び付ける記述】

## Ⅹ 成果と課題

### 1 意識調査の変容と考察

実態調査の結果は以下のとおりであった。数値は「肯定的回答」をした児童生徒の割合である。(↑は10%以上の増加) 【参考：全国学力・学習状況調査質問紙】

アンケート項目 対象児童生徒は小学校：7校（155名）・中学校：3校（237名）		7月 (%)	12月 (%)
1	問題が出された時、まず自分の考えをもつことができますか。	84.9	92.5
2	難しい問題があった時も、粘り強く取り組むことができますか。	75.8	86.0↑
3	授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか。	83.9	94.2↑
4	授業で、自分の考えを友だちに説明したり、文章に書いたりすることはできますか。	58.7	76.8↑
5	国語の授業内容はよく分かりますか。	88.2	94.6
6	国語の授業で学習したことは、将来、役に立つと思いますか。	90.4	95.7
7	算数・数学の授業内容はよく分かりますか。	83.9	86.6
8	算数・数学の授業で学習したことは、将来、役に立つと思いますか。	91.7	92.4
考 察	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 項目2の割合が増加している。課題解決の必要感をもたせること、効果的な学び合いの機会をつくることなどによって、「学ぶ意欲」が継続できたと考えられる。</li> <li>○ 項目3の割合が増加している。振り返り活動を計画的に繰り返し行うことによって、達成感や学びの再構成など振り返りのよさに気付くことができたからだと考えられる。</li> <li>○ 項目4の割合が増加している。児童生徒が必要感もち、目的を明らかにした学び合いを行うとともに、肯定的コミュニケーションを取り入れ、児童生徒が相互の考えを傾聴し合う態度が育つことで、相互の信頼や自信をもつことができたからだと考えられる。</li> </ul>		

### 2 成果と課題（研究の視点1～3）

成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 単元導入で身近な素材を教材化した課題設定を行うことで、児童生徒が解決の必要感をもつことができ、単元の学習に意欲的に取り組もうとする姿が見られた。また、各学習段階の課題設定の工夫によって、児童生徒は「学ぶ意欲」を継続させながら課題解決に向かうことができた。</li> <li>○ 児童生徒に学び合いの必要感をもたせ、肯定的コミュニケーションや目的に応じた教具の活用などの手立てによって、自分の考えを説明することが苦手と感じる児童生徒も積極的に学び合う姿を見ることができた。</li> <li>○ 「学ぶ意欲」を高め、継続させるとともに、振り返り活動を計画的に繰り返し行うことができた。それによって、児童生徒は学びと日常生活を結び付けながら、学習の必要感や達成感を実感することができた。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題設定において、身近な素材や具体物を用いた導入の工夫をより効果的にするために、提示の方法や発問の仕方を工夫する研究を行っていく必要がある。</li> <li>● 学び合いにおいて、問いの焦点化や思考パターンの整理、子ども同士の考えをつなぐ発問を工夫するなど、児童生徒が主体となり、深い学びとなるような学び合いの研究を継続していく必要がある。</li> <li>● 振り返り活動において、振り返りの記録の蓄積と活用、相互評価を適宜取り入れた振り返りカードの作成などによって、各教科の特性を生かし、児童生徒に学びと日常生活の結び付きをより実感させる振り返り活動を研究していく必要がある。</li> </ul>

#### ◇ 引用・参考文献

「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」（文部科学省 2017.3）  
 「小学校学習指導要領解説 総則編」「中学校学習指導要領解説 総則編」（文部科学省 2017.6）  
 「新学習指導要領の手引き」（宮崎県教育委員会 2018.1）

#### ◇ 研究同人

都城市教育研究所所長	吉川 勉	都城市教育研究所庶務	篠塚 藍
都城市教育研究所アドバイザー	黒木 哲徳	都城市立山之口小学校	黒木 義昭
都城市教育研究所アドバイザー	趙 雪梅	都城市立高城中学校	木下 喜史
都城市教育研究所次長	前村 賢一	都城市立祝吉小学校	奥村 瞳
都城市教育研究所主事	大迫 拓也	都城市立大王小学校	齊藤 正行
都城市教育研究所主事	日野 浩二	都城市立西中学校	山崎 省吾
都城市教育研究所主事	井手上 和代	都城市立乙房小学校	高橋 まゆみ
都城市教育研究所主事	兒玉 直樹	都城市立五十市中学校	阪本 成志
都城市教育研究所主事	馬原 祐介	都城市立五十市小学校	山口 耕
都城市教育研究所主事	細山田 修	都城市立縄瀬小学校	古川 ゆか
都城市教育研究所主事	新垣 智規	都城市立中霧島小学校	安藤 義隆